

鉄の王

サボ吉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

光の溢れる純白の部屋

光と音の爆発と共に一人の少年が現れた

孤独に耐え、劣等感を飲み込み、哀しみを誤魔化し、嫉妬を見ず生きてきた少年

水を含んだ真綿に包まれるような息苦しい生活の中、激しい激痛とともに召喚される

しかし、彼は神の園《アルカディア》に至る鍵として殺される運命だった。

この物語はのちに、魔王、厄災の鎖、溶岩と硫黄の同胞、七王の王、錆び山の主、神の敵と呼ばれ恐れられた男の話。

又の名を、

鉄の王 シキ

目次

一話	友と始まり	1
二話	白と鎖	13
三話	黒と開始	20
四話	記憶と王と剣	26
五話	玉と試練	36
六話	復讐と渴き	47
七話	鉄と旅	59

一話 友と始まり

風が強く吹いている。

地平線に沈んでいく夕焼けの色をした木の葉が砂と一緒に俺の背中を撫でその風の肌寒さに秋の気配を感じながらも俺は目的の場所に向かう。

グラウンドと校舎の間の道。

入学以来ほぼ毎日のように通るから慣れたものだ。

グラウンドに響く野球部の声。

カキーンと白球が空に向かって打ち上がる。

その騒がしい放課後の中で、スーツと耳に入るフルートの音が聞こえる。

どこまでも響いていきそうなその音を目指して歩いていく。

いつもと同じあの場所だ。

名前のわからない大きな木の下、小さな影ができてグラウンドを一望できるあの場所。

彼女はその場所を好きだと言った。

そして見えてくる夕焼けの光でキラキラと光るフルートを持つ少女。

背中まで届く黒髪を風になびかせている。

少し遠くからその姿を眺め小さな満足感を得る。

やっぱり綺麗だ。

少女はすつと大きな目を細めここではないどこかを見つめるように遠くを見ていた。

その整った顔立ちの少女の容姿はまるで刃物のような鋭さと冷たさを感じさせる。

滑らかに動く細い指、メトロノームに合わせて時を音で刻み時間に美しさと鮮やかな色を残して消えていく。

彼女は、俺の幼馴染の神崎鈴香《かんざきすずか》。

俺にとって大切な存在であり片思いの相手。

そんな彼女をずっと見ていたがそれではまるでストーカーさん

だ。

風で流された木の葉は踏みつけ向かう。

すると彼女は、こちらに気づいたようでこつちを見た。

「何じつと見てるのよ…」

でもやっぱり怖いな。

その端正な顔立ちを不機嫌そうにしてこつちをみた。

「いやー聞こえてきたからさ。見にきただけだよ」

おちやらけた雰囲気を作り毎日のように繰り返す言い訳を吐く。

俺はこの絵のような光景を眺めていただけなのに。

情けなくて笑えて来る。

眺めることしかできないのだから。

「それしか言わないじゃない。どうせ私たちと一緒に帰りたいでしょ」

答えを聞かずに呆れ顔で持っていたフルートをケースに片付け始めた。

「まあね、俺友達少ないし」

「はあ、しゆう一人なの？ゆうまは？」

「学級委員の仕事で遅れるとき、ほら文化祭とか色々あるし」

「そうなんだ、しようがないねいつもの場所で待てばいいの？」

「うん、すぐ来るって」

「ふふっじゃあこつちも急がないとね！」

鈴香は嬉しそうに笑う。

俺に向けた不機嫌そうな顔と大違いだ。

その笑顔を向けられる相手にどうしても黒い感情が生まれる。

そしてその感情を生み出す自分自身が嫌になる。

いつもだ。

近いのに果てしなく遠く、そして手には届かない。

「ハイハイ、急げ急げ大好きな彼が待ってるよ」

「うるさいー言われなくてもいいよ」

そう言って照れたように声が大きくなる。

やっぱり好きなんだよな。まあわかるけど

この鈴香と悠馬は恋人同士だ。

そして俺の大切な親友で家の近い幼馴染でもある。

この二人は学校でも有名な二人だ。

一つの理由としてその整った顔立ちそして成績優秀、スポーツ万能、

もう嫌味かつ！てほど完璧だ。

天は二物を与えずとあるが俺は信じたことはない。

それに比べ俺は、平凡もいいところ。

少し身長は高く178cmと少し高めだが、部活には入らず肉体労働のバイトで汗を流し灰色の青春を過ごしてきた高校3年生だ。

小説が好きだからか国語の成績はなんとか勝てるが自慢はするつもりはない。

この二人と幼馴染と他の人に言うとき驚かれる事が多々ある。

何度紹介してくれとか告白に協力してくれと頼まれたか…そこそこ辛い。

完全に腰巾着状態だ。実際、影でそう言われてるらしい。

反論できないから情けなくて笑える。

「ないぼけっとしてるのよ。片付け終わったからいいこ」

オレンジ色のシャイニーケースを肩にかけ自分のカバンも持って準備万端だ。

待ってくれるのだからやっぱ嬉しかったりする。

二人が付き合い始めてから別で帰ろうか？と聞くと二人とも気に入るなって笑ってくれる。

本当にいい奴らだ。

しかしクラスのほか人たちには俺が邪魔してるように見えるらしく何回も怒られた。

俺もそう思うかな無効にしたらなおさらそう見えるだろう。

「わかったよ」

俺と鞆をかつぎななおし校門近くの自販機に向かう。俺たちはいつもここで待ち合わせをして帰ってる。

二人して近くのベンチに座りお気に入りのコーヒー牛乳を飲む。

穏やかな時間だ。俺はこんななんでもない時間を愛している。
愛すべき日常。

そう愛すべきなのだ。

「ねえ、きいてる?」

「ん?ああ聞いているきいてる、悠馬と一緒にの学級委員でしょ?大丈夫だってお前が心配するようなことなんてないよ」

「そ、そうかな…でも私、気が強いし…その…お淑やかじゃないじゃないし…だから…」

自覚あつたのかい…

そう思うならもう少し俺に優しくしてほしいもんだ。

言わないけど。

「はあ…安心しろよ委員長さんよりもお前の方がかわいいし器量は上だ。」

「そう…?」

「そう」

わかってるのかわかってないのか。

ウケる。

「えっと…その…ありがと…」

「どういたしまして」

「コーヒー牛乳が苦く感じた。」

「あつーゆーまー!」

少し待っているともう一人の親友がきた。

「よつ待たせたな」

そう言つて綺麗な顔立ちを優しげに笑う。

夕焼けの光が後ろから差し光り輝いてるように見える。

こいつが俺の親友、佐藤悠馬《さとうゆうま》

成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗と三つ揃ったイケメンだ。

「遅かったな、そんなに大変だったのか?」

「ん?まあそうだな。文化祭のアンケートの集計とか色々な」

「そんなんだ。お疲れゆーま」

「おう、鈴香も練習頑張つてたな。教室に聞こえてきたぞ」

「そう？ふふっありがと」

そう言つて二人は微笑みあつた。

「大変そうだな、二人ともお疲れ様だ。」

「ありがとさん。あつ秋也もし暇なら文化祭とか手伝つてくれない？」

そう言つて悠馬はこつちを見る。

「手伝い？まあ暇だしいいけどステージで前やった一人モノマネ大会とかやめてくれよ。」

「わかつてゐるつて考えなかつたこともないけどしなくていいよ」

「考えたんかい！」

どこかの芸人みたいになんてやねんを繰り返す。

もうこの動きも慣れたもんだ。

「あははっ冗談だよ。でも俺は好きだけどな秋也のモノマネ、結構に
てるよ」

「おつまじで？きいたか鈴香？似てるつてさ」

「あははっ確かに数学の谷崎先生のモノマネにてたね。くだらないけど」

そんな感じにくだらない会話をしながら三人で歩く。ちなみに数学の谷崎とは会話するたびねえと必ず言う中年だ。

悠馬曰く一回の授業で平均を200回近くに言うらしい。

あいつもアホなことを調べようとするもんだな。

何処かでカラスが鳴き太陽も隠れ始め段々と薄暗くなる。

空は夕焼けの燃えるような赤色と夜の暗い青色が入り混じつてまるで戦争してるみたいだ。

俺はこの時間の空が好きでよく空を見上げる。

空には控えめに光る小さな星屑が見えた。

「大変だつたんだからなー」

「ふふっそうなんだえらいえらい」

細い道に入りいつの間にか前で肩が触れ合うほど近くで歩きお互いに笑顔を向け合う二人の後ろ姿を見ながら歩く。

見たくもないものはどうしても俺の前を歩き続けるのだ。

全てにおいてこの二人はそういうものなのだ。
使い古し垢まみれになった嫉妬と劣等感を飲み込みこの場から去る。

お互いにとつてそれが一番いいはずだ。

「あーあれだ。スーパー今日特売日だったんだ。だから先に帰るよ！」

なんでもないようにおちやらけた雰囲気を作り明るく笑いながら二人に伝える。

「ん？そっかーわかったよ。じゃまた明日な！あつ前話したマンガ貸すから後でうちこいよなー」

「そう。わかったわまた明日」

「悪いな じゃあなお二人さん！イチヤつくのも大概にしろよー」

そう言つてスーパーの方向に曲がり二人になる背を向ける。

冷たい風が頬を撫でカラカラと音を立て木の葉が踊る。

早く去りたくて早歩きで歩く。

どうしようもなく溢れ出てくるイライラを捲れたコンクリートにぶつけるために蹴つてやった。

コツコツと転がりながらぼちちゃんと音を立てて溝に落ちる。

ははっざまあみろ

我ながら器の小さい男だ。

二人の歩く方より大きく遠回りしてマンションに向かった。

ボロい二階建てのアパートの一部屋が俺の家だ。六畳一間風呂なしアパート

「たーだいまー」

返してくれる人はないが小さい頃からの癖でそう言った。

しんとした静かさが冷たさを感じる。

昨日の晩飯の茶碗を水につけたまま放置してあり蛇口からぼちやんと水滴が落ちる。

少し臭ったから電気といっしょにグオングオンと耳障りな音を立てる換気扇をつけ冷蔵庫をあさる。

カンカンと音を立てて蛍光灯が 途切れ途切れに光る。

少し前からこの状態だ。

そろそろうぎくなってきた。

「もやしもやしっ」と…」

冷蔵庫の中は結構寂しい状態になっている。

ほとんど調味料だけだ。

あと腐りかけの牛乳。

「あれーこれは本当にスーパーに行った方が良かったんじや」

その場を去るための言い訳に使ったわけだがもやしと調味料だけの状態をみてそんなふうにも思ってしまう。

どうしょ。

今日使った言い訳のせいで明日スーパーに行きにくくなってしまつてなんだか心が沈む。

冷たいドアノブをひねり散らかった部屋の中に入る。さつきまで着ていた学ランの上着を床に脱ぎ捨て、別にみたくもないテレビのプラグ野球をBGMにしながらベットに転がり天井を見上げる。

俺は、高校に入った時から一人暮らしをしている。

慣れない料理も自分でしてるし結構寂しいけどあの家よりましだ。

ちやんとバイトもしてるし多分大丈夫。

これ以上あまり迷惑はかけられない。

一応あの家族にも感謝してるんだ。

そう思いながら目を閉じる。

あの二人が付き合い始めたのは高校入学して少し経ってからだ。

親友と好きな相手の恋愛相談をしてあの二人をくつつけるのには結構貢献したと思う。

幸せそうな二人を見てると嬉しかったり悲しかったりする。

どれが一番だ大きな気持ちなのか自分でもわからない。

でも、やっぱり小さい頃から一緒に遊んでた大切な幼馴染たちだ。きっと嬉しいのだと思う。

昔は二人とも俺の後ろをついてきていた。

その三人でいろんなことをした。

たくさんイタズラをした。

鬼ごっこで近所を走り回り虫を捕まえ海に行き秘密基地を作った
りした。

今思えばあの時が一番輝いていたかもしれない。

いつも三人で遊んで俺がリーダーみたいで中心になっていた。

鈴香と結婚の約束とかも小さい頃はした。

あいつは覚えてないけど。

そして小さな小学校を卒業して中学に入ると思い知らされた。少
しずつ大人になるにつれ二人と俺の差は広がっていつて俺はおちや
らけたように誤魔化すのが上手くなった。

今では近くににいるけどとても遠い、そんな感じが拭えない。

二人の場所は俺には高すぎる

そんなくだらない暗い感情を抱える俺を二人は変わらず仲良くし
てくれる。

俺にとっても二人はかけがえのない大切な存在だ。

「はあ…何食べよ」

夜からバイトが入っているからしつかり食べないと体が動かない。

面倒くささを感じながらもスーパーに向かう準備をする。

水を含んだ真綿に包まれているような息苦しい毎日これが俺の日
常だ。

すると遠くから6時を知らせる放送と音楽が流れるかあちゃんが
小さい頃よく歌ってくれた歌だ。

その時だった。

「あがあっつっ!!」

突然とてつもない激痛が頭の中で暴れまわる。

目の前が弾けたように真っ白になった。

頭の真ん中に焼けた石をいきなり入れられたような痛み。

今までの人生で一度も感じたことはないし感じると思ったら死ぬ時
だけだろう

目の前も世界全体がひっくり返されたようにグオングオンと回る。

頭痛とかそんなレベルの問題でないことは考えなくてもわかった。

このままじゃ死ぬ。

それだけは確かだ。

生物としての生存本能が大きな音を立てて警鐘を鳴らす。耳鳴りや目眩のせいで平衡感覚が奪われ床に崩れ落ちる。目の前が赤く染まる。

はたから見れば目や耳から血が流れる泣いているよに見えただろう。

ただそんなことは今の俺にはどうでもいいことだった。

永遠とも思える時間が流れていく。

次第に体の感覚も薄れ痛みも弱まる

「だ…れつか…」

多分死ぬのだろう。

今思えばいいことはあまりなかった。

たった一人の家族を失い劣等感にまみれて腫れ物のように過ごす日々だった。

あの柔らかさと優しい微笑み愛されていたという事実が嬉しかったあの時。

光に満ち溢れ希望に満ちたあの時。

ああ死ぬのか。

「かあ…：…ちや…ん」

意識せずにそんな言葉が出る。

最後の言葉がそれではあまりに閉まらないだろうに。

そんなことを思いながら薄れる痛みの中俺は意識を手放した。

…

どこかの世界の

どこかの星の

どこかの大陸の

どこかの国の地下には

純白の部屋があった。

四方を継ぎ目のない部屋は清潔感より不気味さを感じさせるほど

神経質なまでも白さだ。

その部屋の中央にある手術台のように人一人が寝られるほどの祭壇がある。

その祭壇もまるで穢れを知らない初雪を固めたように白くまるで奇跡から生まれたような美しさを持っている。

その祭壇の上で光が白く輝き白の部屋ひかりで満たしていた。

「はじめろ」

どこからかそんな声が聞こえる。

年老いた老人の男の声だ。

その男白く豊かな髭をたくわえ白い法衣をまとっている。顔を隠している仮面も白だ。

この白だらけの空間では目立たないはずがどこか目が離せないほどの存在感を放ち細身の体が大男のように大きく見える。

「はっ」

まわりにいる男たちも同じように白の法衣に白の帽子に仮面と明らかに普通の雰囲気ではない。

それぞれ法衣の背中には円を一本の棒が貫いている金色の印をつけている。

男達が動き出した。

「魔力供給異常なし」

「次元固定完了」

「座標軸の固定完了」

「対象補足並び身体固定、精神固定完了」

「バルハバルの祭壇魔力充填完了まで残り10%」

「対象の身体に異常を感じこのままでは死亡します!」

「充填いそげええ!!!この機会を逃してはならん!」

老人が叫ぶように男たちを叱咤する。

「充填完了!バルハバルの祭壇発動!!!」

キュイイイイイイイイイイン

甲高い音が次第に大きくなっていく。

白い部屋を満たしていた光がさらに輝きを増し男達は皆顔を隠し

てその光に耐える。

バンツツ

大きな音と共に光が消えまわりが見えるようになる。

祭壇の上には先ほどまでなかった物が横たわっていた。

黒髪黒目の男だ。

身長は高く180cm近く手足も筋肉質、顔は平たくそれ以外は特徴のない平凡な男だった。

しかし、右足は時空を超えるのに耐えられなかったように赤く潰れてもはや足かどうかともわからない。

顔も血で濡れている。

目や耳から血を流しているようだ。

どこからどう見てももう助からない命にしか見えない。そもそも今生きているかも怪しい。

しかし、この世界の常識は違う。

「召喚成功……！」

「回復魔法いそげー！」

中央に佇んでいた大きな存在感を放つ老人の横にいた少女が無表情に黒髪黒目の男に手を向けた。

すると手のひらを中心にして白色の古代魔法文字《ルーン》で作られた魔法陣が広がる。

「極大回復《エクストラヒール》」

光が体を包み時空転移のせいで潰れていた足が時間が巻き戻るかのように治る。

これほどの回復魔法となると人族の選ばれた天才のみに許された第4階位になる。

しんつと沈黙が訪れる。

「ああああああ」

老人はヨレヨレと歩きながら横たわる男の元へと向かう。

まるで誰よりも愛しい女が生き返ったかのようにほうけている。

そしてポツリと

「素晴らしい………」

と言った。

「素晴らしい素晴らしいっ！素晴らしいいいっ！！

素晴らしいいいいい！！」

老人は魂が震えるような叫び声を天井にむかってあげる

法衣の老人が大きな声を上げて笑う。

その目は大きく見開き血走って大きな欲望でその男を見つめていた。

「ふふっ…：神の園 《アルカディア》 に至る鍵になつてもらおうぞ岸秋也
《きししゅうや》…：愛しい神の鍵よ…：そして…」

男は神の鍵と呼んだ黒髪の男を見つめて大きく顔を歪め狂気を感じされる笑みを浮かべ骨と皮の老人らしい手で艶やかな男の髪を愛おしそうに撫でた。

「我らの魔王よ…」

その日この世界に一人の少年が現れた。

のちに、魔王、厄災の鎖、溶岩と硫黄の同胞、七王の王、錆び山の主、と呼ばれ恐れられる男。

又の名を

鉄の王 シキ

二話 白と鎖

ここは…どこだろう…

まだ目は閉じたままだがまどろみの中でかすかに意識が戻り始める。

ふわふわとした感覚が全身を包み柔らかな暖かさで包まれている。そうだった。

俺は突然の頭痛で死んだのだ

あれが噂に聞く脳卒中なのかもしれない。

俺は医者でもないし知識もないが脳卒中になるような高血圧でもないしまして高齢でもない。

ぴちぴちの16歳だ。

その上一人暮らしだったが不摂生な生活もしてない。

でも結果死んでしまったみたいだな。

16で脳卒中で死ぬとは我ながらなかなか不幸な人生だとなんか笑える。

そんなふうに関身自身を笑う。

ここまですると笑い話だ。

つまり死んだと言うことはここは死後の世界そしてこの暖かな感じきつと天国だ。

天国に違いない。

自分で言うのもなんだが結構真面目に生きてきたし大した悪いことはしてない。

せいぜい子供の頃のイタズラ程度ださすがに神様もイタズラで地獄に落とすなんて酷い真似はしないだろう。

死んだ後に考えるのは幼馴染の二人の事。

あいつら悲しむだろうな。

そのことが死んでしまったことで一番悲しいことだった。

俺にとつてあの二人はやっぱり大切な存在だったみたいだ会えないと思うと悲しくなる。

それが唯一の後悔だ。

もつと一緒に居たかった、話したいことたくさんあった、二人に認めて欲しかった。

そんな気がする。

あの二人には幸せになつてほしい、死後の世界から見守ることにしよう。

でもなあ俺童貞なんですよね。はあ…

彼女欲しかったなあ

そんな事をアホな高校生らしいことを考えていると暖かな気配が薄くなつていく。

その代わりどんどん冷たく鋭い気配が強くなつていくきそのことに強い嫌悪感を抱く。

自分の魂を汚されていくような感覚。

なんだ？

何かがおかしい

すると突然漂つていた白い空間が揺らぎ始め暗い穴が開いた。

この白い空間の中で明らかに異質であつてはならないもの。

その闇の穴は、まるで全てを飲み込むように大きな口を開けている。この穴に入ったらダメだと言うことがなんとなくわかる。

その場から離れようとしたそのとき、

その穴から血の色をした鎖が飛び出しおれの右腕に絡みついてきた。

明らかに普通ではない。

見ただけでわかる。

逃げなければ

逃げなければならぬこの得体の知れない鎖から逃げなければならぬ。

俺は慌ててその鎖を解こうとするが肉を巻き込みきつく絡みついてビクともしないな

すると次は、脳卒中の時のような頭痛が襲う

またか!!死んだんじゃねえのか!!

くっそっ!!

何なんだよっ！これっ！

くそっ痛てえ！

この空間では助けを呼ぶ声も頭痛に苦しむ声も音にはならない。死んでもなおあの痛みを感じさせられるとはこの世界は俺に残酷だ。

痛みのせいで対抗する気も起きない。

そうしておれは鎖に掴まれたまま黒い穴に落ちて魂は体に引っ張られていく。

そして体に魂が戻った。

祭壇の上には血の色をした鎖に縛り付けられた傷ひとつない黒髪黒目の男の体。

しかしその体に行われているのは人類の負の遺産による禁忌。

魂縛の禁呪。

それによる副作用としての激痛が俺の魂と体を襲われ身体中に焼けるような熱と絶え間なく続く頭痛が走る。

「ががああああああ!!!」

獣のような絶叫。

目玉が飛び出るほど見開き唾液を垂らす。

白い空間の倍は激しい痛みが体を襲い魂を汚す。

俺を痛めつけるために1秒が引き伸ばされたような感覚。

時間まで俺の敵になったようだ。

さっきまでの幸せな感情が嘘のように黒くドロドロとした感情に塗りつぶされていく。

だめだ。

これはいけない。

痛みと恐怖に耐え切れず逃げようとするがガチャガチャと金属の音どうやら手足や体を拘束されているようだ

痛みに耐えきれず暴れることも許されずただ痛みと禁呪による絶え間ない蹂躪。

涙と鼻水や失禁で身体は汚れている。

正に地獄とはこうゆうものなのだろう。

ああ犯されていく。

あの暖かな白い空間にもどりたい。

「がああ!!やめでーだずげええで!!!アアアアア!!」

魂を縛られるその感覚が俺を襲う。

ガチャンツ

そんな音とともに俺はまた意識を手放し魂の安寧を失った。

.....

神聖アティア教国

聖都アズーロから南東に向かって馬車で一週間の位置にその場所はあった。

テラーサの丘

そこは、聖人アティアが神敵バルバトスの首を槍で突き刺し神に捧げたと言う聖地だ。

そして今現在は神聖アティア教国の国教アティア教から見た邪教徒や神の敵として判決を下された罪人たちが処刑される場所となっている。

ここで邪教徒や罪人を殺すことはアティア教の最大の誉れであり神の信徒の証明とされている。

そして同時に最も恐れられている場所だ。

テラーサの丘は辺り一面血と土の色が混ざったような赤銅色の土が多いつくし草木一本生えない不毛の地となっている。

アティア教が誕生してから約千年間、三日と開けず神敵バルバトスのように頭を槍で突き刺すという方法で処刑されている流れた血のせいで生命を全く感じない聖地。

その呪われた死の聖地テラーサの丘に大きな砦が立っている。

その名はストラ砦。

そこには常に罪人が集められているが今は違う。

今ここでは処刑など生温い唯の救いの方法にしか見えないほどの

ことが行われていた。

ガチャンツ

魂が縛られる音がする。

絶望の音だ。

目がさめるほど冷たい沈黙がその純白の部屋を押しつぶす。

「…クロデリアの血鎖…による魂縛…成功…」

聖人アティアが魔女クロデリアの腸を使い魔王を縛り封印したとされる聖遺物だ。

その聖遺物は長い時間と信仰で禁呪の効果を持った物。

それがクロデリアの血鎖だ。

その神話級《ミソロジー》のアーティファクトによる魂縛の禁呪の成功。

つまりこのキシシユウヤは死してなお、神の御許に至らず永遠に救われない無限を味わうことになる。

目の前で自分たちが行なった悪魔の所業。

白衣の男たちは目を背けずにはいられなかった。

神の御許に至れないとゆうことは、この敬遠なアティア教徒達にとってこれ以上ないほど恐ろしい事だ。

しかも、このキシシユウヤにはまだやらなければならないことがある。

魂を広げ魔力を増やし肉体を人族のものより伝説の魔族に近付ければならない。

全ては神の園《アルカディア》へと至る鍵にするため。

そのことを思うと白衣の男たちはこの異界の少年に対して同情を抑えられなかった。

それと同時に自分たちがこの息子ほどの年齢の子供に対して行わなければならない処理のことを思うと途端に恐ろしくなら始める。

その場で紙に祈りを捧げ許しをこうアティア教徒たち。

どうかこの少年に救いがあるようにと無責任なことを願うのだった。

「ふつつふはは!!成功か!よし!よくやった。明日の明朝に鍵の製造を再開する!」

豊かなヒゲを蓄えた老人が大声で指示する。

おそらくキシシユウヤの世界の者が見るとサンタクローズのように見えるはずだ。

しかしその優しい風貌とは真逆の所業をキシシユウヤに与え続けるアティア教の狂信者だ。

「クロイツ枢機卿!お待ちください!!この状態の少年に明日は早すぎます!せめて3日後からでないと少年がキシシユウヤの体がもちません!」

慌てて祈りを捧げていた白衣の男の一人がクロイツという老人に意見を申し立てる。

しかし少年の体が持たないと言っているがキシシユウヤに施された魂縛の禁呪は身体的にはなんのダメージも与えてはいない。

与えるのは禁呪に対しての膨大な恐怖と仮想の激痛だけだ。

この男は禁呪を見て少年に同情をしいていた。

しかし、結局この少年に処理を行うのだからこのクロイツと同じ穴の貉だ。

信者としても人としても未熟さを見せてしまう。

「何を言っているのだ?禁呪による肉体的なダメージはないはずであるのは精神的苦痛だけだろう。神の鍵はまだ未完成だ。何より聖都では勇者召喚の準備が始まっておるのだぞ。むしろ早くしなければ召喚までに間に合わん。そもそも少年ではない。神の鍵だ。愚か者!」

そう言つてクロイツ枢機卿はその男を叱咤する。

「しっ、しかし」

「そもそもこれはアティア様の神託だぞ!!我々は神の敬遠な使徒としてこの試練を乗り越えねばならぬのだ!!」

そう言つてクロイツ枢機卿は目を大きく見開き血走らせながら大声で叫ぶ。

そのクロイツ枢機卿の試練という言葉により神に祈りを捧げてい

た白衣の男たちははつとする。

そうなのだこの少年に対する同情や自分の行う所業への恐怖は試練なのだ。

これは悪魔の試練。

この《鍵》は私たちを貶めようとしていると、すると男たちの顔からは同情や恐怖は消え失せ神の信徒としての責務を果たそうと固く心に誓うのだった。

そうしなければ人間性を保てない。

どこの世界も人は信じることで救われる。

なんとも無情な事実がそこにはあった。

「いいなあ!!アティア教の敬遠な信者たちよ!!これは試練なのだ!お前達の神への忠誠を示せ!」

「「はっ」「」」

この偉大なる神に捧げる忠誠は異界の者のキシシユウヤにとって悪夢でしかなかった。

三話 黒と開始

真つ暗な所。

上も下も曖昧でまるで宙に浮いているようだ。

どこを見ても黒の視界の真ん中に輪郭が曖昧な黒い人型のモザイクが立っている。

身長は子供ほどの高さだ。

「やあやあこんにちは」

まるで小さな女の子の声にエコーがかかったように間延びして聞こえる。

不気味な存在。

「ここに人が来るなんて久しぶりだよ」

顔はモザイクで見えないが笑っているのは分かる。

「君も災難だねえー。こんなところに閉じ込められちゃうなんてさ」

モザイクの少年はやれやれといった風に肩を上げる。

「ここに閉じ込められた理由は大体想像つくよ。かわいいそうに」
そう言っただけ息をついた。

何と人間味のあるモザイクだろう。

「あつそうだねそうだねまだ閉じ込められてないね」

声をあげてバカにするようにパチパチと拍手をする。

「ふふっふふふっよかったね。よかったね。まだ助かるかもしれないよ」

モザイクの少女は何を言っているのだろう。

もうろうとして起きているのかあいまいな感覚

まるで夢の中にいるようだ。

「違うよ。夢じゃないよ。」

返事が帰ってきたことに驚く。

喋ってないはずだけどわかるのか？

「そりゃあねここは魂だけしか来られないから肉体がないのから直接伝わってくるんだよ」

「不思議空間の不思議な法則さ」

お前は喋ってるじゃないか…

「僕は特別なんだよ」

ふーん…ところでお前はなんだ？

真つ黒なモザイクしかわからないんだけど

名前とかないのか？

「ん？ぼく？ぼくのなまえかー」

うんうんと唸りながら考えている。

そして見えないのにニヤリと笑ったのがわかる。

「ふふつまぁいいよ。クロってよんで」

黒い空間だから黒…

単純な名前だなあ…

「まぁいいじゃん」

いいけど…取り敢えずここはどこなんだ。

「ここはね。んーなんといいたらいいか…魂の牢獄って言ったらわかりやすいかなあ」

魂の牢獄…俺は死んだのだろうか…

「ううん、かろうじてまだ大丈夫だよ。良かったね。でもね死んじやうとね。ずーずーと中に閉じ込められちゃうんだよ。君は捕まってしまったからね血の鎖にさ」

あの鎖か…

あの白い空間の中で襲いかかってきた血の色をした禍々しい鎖が脳裏に浮かぶ。

「多分それだね。アティアの売女が作った禁忌の一つさ。まああれはここに閉じ込めるため一つの鍵でまだ他にもあの鎖のような鍵はあるけどんでもないもんだよねえ」

アティアの売女…

つまり…出られないとゆうことか？…

「そうだなあ、魂だけの存在つまり死んだあとなら出られないけど君はまだしんでないからねえ。向こうで目が覚めたら向こうに戻るよー。それがいいことなのかは、知らないけどさー。あと売女は気に

しない気にしない」

おちやらけた様子でニヤニヤしながらこつちをみる。

俺はどうなったんだ？

「うーんなんてゆうか雌豚のアティアのクソ傀儡どもにこの世界に連れ去られちゃったんだよーいわゆる召喚てやつだねーかわいそかわいそ」

クスクスと口を隠しながら笑う。

召喚…？異世界に？

「そそっ君を呼び出したんだよー。あつ、まだ言つてなかったね」

モザイクの少年はこつちを向き直していった。

「ようこそ我が家へ、ようこそ異世界オゼへ、歓迎するよ異界の旅人キシシユウヤくん♪」

そう言つて嫌味つたらしいニヤニヤを浮かべながら両手を広げる。

なんだか腹立つ…

「ふふっもつとおしゃべりしてたいけど…残念、どうやら君にお迎えがきたようだねえ。きてしまったと言うべきかなあ」

そうモザイクが言った途端、意識が引つ張られる感覚が襲ってくる。

なんだ!?!どうなってる!?

「またねえキシシユウヤ」

そうしておれは消えた。

………

「ふふっあははっ」

久しぶりに来た魂

彼の魂はいびつに見えた。

僕はそれが面白くて笑いが止まらない。

「ふうーまたアティアの後継者はまたとんでもないのを呼んだなあ」
彼には言つてないし言う必要もないがこの場は魂そのものの形で現れる。

僕はこの牢獄そのものだから、僕はモザイクとして現れるが。

まあそれはいいでしょ

「何とまっすぐでねじれていびつな形だ」

どうしたらああなるのかわからない。

さして巡ってきた最高のチャンス

「ふふっこれは面白くなりそうだ。」

かつて勇者と言われた者と一人の魔王の記憶

忌まわしき血の記憶

僕は彼が歩むこれからの物語に思いをはせた。

悲劇となるか喜劇となるか

どちらもハッピーエンドとは程遠い

.....

光が目差し眩しきで顔を歪める。

ここはっ…確か俺は…

なんとか目をひらく。

眩しきで目の奥がツンとなる。

そこは純白の部屋。

清潔感よりも不気味さを感じさせられる。

ここはどこ…

理解の追いつかない状況と不安で頭が働かない。

目を刺していた光を隠すように黒い影が伸びてきた。

「おおお、目覚めたか！神の鍵よ!!」

そして飛び込んできたのは白ひげの男

目尻にはシワが何本も刻まれ男がそれなりの年齢を重ねてきたこ

とがわかる。

何より特徴なのはその豊かな髭だ。

胸元まで伸びた白い髭はひかりで反射してキラキラと光る。

高級そうな白色の法衣をまといそれなりの地位になる人物だとわかる。

まるでサンタクロースのように優しそうな顔だ。

それだけならまだまだ。

しかし、今俺の体は何本もない革ベルトで手足や首、腰、胸そして

口までも固定されている。

冷たい恐怖を感じた。

「初めまして神の鍵よ。私の名前はクロイツ・リ・ウォーレンという。アティア教では枢機卿として神にお仕えるさせていただいている者だ」

アティア教：あのモザイクが言っていたのはこいつらか。

つまり召喚したのは…

老人は節くれだつた指で俺の顔を撫でる。

「ああ愛しい我らの救世主…！我らを神の園《アルカディア》まで導いてください！」

クロイツといった老人が目を血走らせ興奮しているように息を荒げている

俺はその様子に不気味さを感じ逃げ出したくなる。

「んんーっんんー」

俺は暴れるがガチャガチャとベルトが音を出すだけだ

猿轡のせいだ声も出ない。

老人は振り返り後ろに控えている白衣と白仮面をつけた男たちを見た。

「アティアの愛子よ。これより鍵の製造を再開する！！アティアの名の下に！」

「アティアの名の下に！」

信者たちが一斉に跪く。

そしてクロイツがこちらを向き話し始める。

「神の鍵よ。まずは、魔力を増やすことから始める。異界の者には魔力、つまり魂の器を満たす力がない。なぜなら魂の器が小さ過ぎるからだ、そなたの世界には魔法がないのであろう？」

本来ならば魔法を使いながら少しずつ増やすのが常識だが…しかし我々には時間がない。無理やり魂の器を広げさせてもらう。大丈夫だ。安心しろ。バルハバルの祭壇の効果でお前は死なない。痛みはあるがな…」

目を細めながらクロイツはそういった

その言葉に俺の背中はずつと冷たくなる。

魔法や魔力の存在を知らない素人だが魂や魂の器を無理やり広げる事の恐ろしさは伝わる。そしてそれが自分に行われるのだ。

突然異世界に召喚され魂を縛られこの純白の祭壇の上に拘束される。

そのことだけで岸秋也の心は恐怖で埋め尽くされていたが聞くだけで恐ろしくおぞましいことを今から始める。

そう思うと自然と涙が出てくる。

そのことを誰も笑うことは許されない。

なんで俺なんだ。

俺が何をした。

悪いことなんかしてないのに。

降りかかる理不尽に幼稚な疑問が溢れ出る。

頭が働かない。

動悸が止まらない。

涙が止まらない。

足音が近づいてくる。

唯一動く目を動かす

すると黒い兜のようなものを被せようとしているのが見えた。

兜の中は墨をぶちまけたような闇で満たされている。白仮面の男の一人がゆっくりとそれを丁寧におろし頭にはまり目もいっしょに隠される。

やめろ…

「っんん！んんん！っー」

カチャリ

やめてくれ、やめてくださいお願いお願いします

「……始めるぞ」

悲劇は止まらない

あとは底のない崖を転がり落ちるだけ

四話 記憶と王と剣

優しい人になりなさい。

痛みをわかる人になりなさい。

助けてあげられる人になりなさい。

傷つけるより傷つけられる人になりなさい。

損をしたっていい

優しい人はそれだけで幸せなの

母は俺の頭を優しく撫でながらそう言った。

いつだっただろうか。

幸せな愛を感じる愛しい記憶。

その時僕は母の言葉がとても素敵なことだと思った

そして今、岸秋也の大切な一部になっていた。

痛みと絶叫の中で思いだす。

優しく甘い記憶

.....

「入れろ」

真つ暗な闇が満たす牢屋

窓一つなく岩が引き詰められている。

自身の糞尿の臭いが充満し清潔な純白の部屋と打って変わってこ

れ以上ないほど不衛生な場所だ。

俺は白仮面の信者達に引きずられるようにしてこの部屋に放り投

げられる。

俺は全く抵抗しない

ガチャンっ

大きな鉄の扉が閉まる。

唯一の光は鉄の扉と壁の間から溢れる小さなものだけ

俺はそれに縋るように身体をひきずり向かいそこで力を抜いた。

じくじくとした痛みと熱と全身が筋肉痛になったように動く度鈍い

痛みが走る。

この世界に召喚されてどれくらいの時間が流れただろう少なくとも一週間や二週間ではない。

まずはじめに施された魂の拡張により今俺の体には人が本来、宿るはずのない量の魔力が宿っている。

クソジジイ曰く赤子同然の器を三日三晩広げ続けた結果だ。

そのほかにどぎつい原色の液体を体内に流し込まれたり鼻の曲がるような匂いのする液体の中につけ込まれたりした。

拷問のような人体改造は激痛とそれに伴う副作用が俺を襲った。頭痛、腹痛、吐き気、目眩、高熱、痙攣、壊死、失明。体が壊れるたび皮肉にも奇跡のような魔法により治療され改造は止まることはない。

そしてたび重なる改造の痛みと副作用による睡眠不足で俺の精神は着実に犯されていった。

唯一の救いは体の熱を冷ます冷たい石の床だけ。

なぜこんなことになったのか：

なぜ俺なのか：

終わりはあるのか：

あの日から繰り返される答えのない疑問。

ただわかるのは明日もこれが続くと言う絶望だけ。

たすけてくれ：

涙は枯れ流れることはない

求めるのは苦痛の解放それだけだった。

それが死であれなんであれ今の俺には救済だった。

しかし、この地獄にも小さな救いもあった。

(またこっぴどくやられたねえ)

頭の中に響く少女の声。

答えのない自問自答を繰り返す俺を現実に引き戻す。

(くろろ?)

(そうだよシユウ。愛しのクロちゃんだよ)

あの魂の拡張によりクロは俺に話しかけることができるように

なった。

それが嬉しかったのは言うまでもない。

(今日もこっぴどくやられねえ)

クロがはあとため息をつく。

(でも大丈夫、大丈夫だよシユウ、終わりは近い。君はもう少しで完成だよ)

もう少しで終わる。

久しぶりの明るいニュースだ。

微かな光が差した気がする。

(そうか…やつと…)

それを理解した途端力が抜ける。

(つまり俺は死ぬってことか?)

今の俺にとって死は救いでしかない。

たとえ牢獄で永遠を過ごすことになっても

(いいや。君が死ぬのはもつと先だ。けど地獄はあと少し、あと一つだけだよ)

全てを知っているかのように喋るクロ

そこに疑問が湧く。

(クロは何があるのかしってるのか…?)

聞いたところで何も変わらないが最後と聞いて力が湧く。

この悪夢の終わりそれも死ではないという。

とつくに諦めていたはずが生にしがみつく。

(ああ。知っている。知っているとも)

クロは自分のことのように喜んでくれる。

それがなにより嬉しかった。

(この地獄は全て下準備でしかない。全ては最後シユウが魔王に至るためにあつたんだよ)

魔王その言葉が耳に残る。

(魔王…?)

(そうだよ。君ならなれるさ。痛みと理不尽、絶望と悲しみ、小さな幸せすら奪ったこの世界に一緒に復讐しよう。大っ嫌いなくそつたれ

でロクでもない世界に!!)

クロの言葉に力と憎しみが込められて行く。

そしてそれがふと消える。

(ふふっだから今はもうお休み。寝たら忘れられる)

そこでスーツと眠りに落ちる。

.....

神聖アティア教国の聖都アズーロ

聖人アティアの子孫が起こしたと言われる国だ。

その歴史はすでに八百年を超えている。

人族の大半がこの宗教を信じ人族の国に大きな影響力をやっていく。

ある国を教皇がもし「神の敵だ」、と言えば周辺国に一齐に攻め入られ後は滅びを待つのみとなる。

実際、滅ぼされた国は両手では足りない。

その神聖アティア教国の聖都アズーロは聖地としてではなく大陸最大の都市としてや文明や技術の発信地として名高い。

白を基調としたら街並みには人々の活気ある声が響き子供達は走り回る。下水路も上水路も整備され洗濯物をする主婦の下世話な井戸端会議も盛況だ。

華やかな美しい街だ。

しかしそれと同時に多くの犠牲があるのは忘れてはいけない。

その聖都アズーロの中央にそびえ立つ白亜の大聖堂

その中の一室でアティア教の最高の権力者たちが集まっていた。

「報告は以上になります」

そう言って円卓の席に座る一人の老人。

純白の法衣に身を包み豊かな髭を蓄えている。

その老人の名はクロイツ・リ・ウォーレン。

アティア教の枢機卿でありそれと同時にキシシユウヤに地獄を与えている人物の一人だ。

「ウォーレン枢機卿、報告ご苦勞。神の鍵の製作は順調なようだな」

「はっ恐縮であります。アイリア陛下」

円卓の席の一つ、神の像の真下に息を呑むほどの美しい女が座っている。

アメジストのようなすっとした目。肩まで流れる白銀の御髪は星のような輝きを見せその髪に包まれた顔は歴史上最高の芸術家作り上げたよう。アティア教の最上位の法衣を身につけ跪きたくなるような美しさとカリスマを放っている。

教皇アイリア・アズーロ・リ・アティア。

人族最高の権力者にして人の範疇を逸脱した者。

もしこの場に魔力を感じる事が出来る物なら裸足で逃げ出したいくなるような圧力を感じるだろう。

天才を超えた光魔法第五位階の使い手。

この世界でけっして怒らせてはならない人物の一人だ。

「あとは、魔王の宝玉の移植と勇者の召喚か…ふふっ神の園《アルカディア》は近い」

はつとするような艶のある笑みを浮かべている。

「はい。肉体の魔族に近づいており、それに加え魔王の宝玉を受け入れられる魂の器は完成されています。あとはガラハットの首輪による隷属のみであります」

クロイツは説明をする。

「そうか…宝玉を受け入れられるほどの器…それは私よりも大きいのか？」

悪戯めいた笑みとともに魔力による圧が増す。

気の弱い人物ならば気絶していたであろう。

しかしこの場にいる全ては世界最大の宗教、アティア教の枢機卿と一桁台の聖騎士達だけ。

それぞれアイリアには劣るが規格外の猛者どもだ。

クロイツは背中に冷や汗を流れるのを感じながら言葉を発する。

「おっ恐れながら申し上げます…宝玉を受け入れるには人どころか…かの竜王を越えるほどの器が必要になります。ですので…いささか足りませぬ」

「なっ！」

「竜王だどっ！」

「厄災級の魔物を超えると言うのか！」

そのクロイツの話した事実にもその場が騒がしくなる。

厄災級とは神の罰や死の疫病と同じ扱いをされている。

人間が抗い退けるにはあまりに大きな災い。

聖騎士たちならば災害級の魔物を倒せないこともないがそれでも死を覚悟しなければならない。

ほぼ人類最強の聖騎士たちが倒せる災害級を超えるほどの災い。

それほどの魔力をもつ神の鍵に恐怖を抱いた。

「ほお…」

アイリアは目を細めてクロイツを見る。

「しかしご安心を、たとえ逃げ出したとしても神の鍵がその魔力を使う術はありません。勇者召喚のような正しい手法ではないバルハバルの祭壇による裏技のような召喚により魔法を扱うことは神との誓約により不可能です。それに魔力回路も幼稚なもの。例えて言うなら巨大な湖から手で水をすくうようなもの。せいぜい力が強い程度でしょう。さすれば、心配はご無用です。」

クロイツの安全を証明する説明した。

そうキシシユウヤには膨大な量の魔力があるがそれを使い魔法を行使することは不可能。

竜族の放つブレスのような生まれた時から使えるものならば話しは別だがキシシユウヤはただの人族。

それどころか魔法のない異世界出身だ。

脱走はほぼ不可能な上にその気になれば一瞬で無力化が可能だ。

「そうか…ならばいい」

アイリアはそう言っただけため息を吐きながら椅子に背を預ける。

いくらアイリアでも、厄災級の魔力を持つ神の鍵の全力を退けられるとは思っていない。

それと同時に、神の鍵が逃げ出し力をつけでもしたらもはや…手をつけられない。

確実に憎しみをアティア教にぶつけ滅ぼしてくるだろう。

我々だけではなく世界そのものにも及ぶかもしれない

この世界の者ではない神の鍵そのことに躊躇はないだろう。

かつての伝説の神敵、虚ろの巨人バルバトスのように…

それだけのことはしているのだ。

しかしその不安を取り除くだけの説得力があった。

そして安心を感じている。

(ふふっ私が人間らしい感情を持つとはな)

アイリアは内心笑う。

「しかし、ウォーレン卿。ガラハットの首輪で隸属できるものなのですかガラハット首輪も伝説級《レジェンダリー》のマジックアイテムですがクロデイルの血鎖には格が劣りますが…魂を縛っているとはいえ魔王の力が発動したりしないのですか？」

一人の若い聖騎士から疑問が浮かぶ。

「心配は無用だ。アルムス聖騎士」

そう言って若い聖騎士の疑問を問題ないと言い切る。

「一桁《ナンバーズ》の末席といえそのような弱気では困るぞ。確かにそうだか魔王の力は鍵と揃わんと発動せん。例え発動したとしても自分が倒すくらいの気概はないのか？」

そう言ってアルムス聖騎士を攻め立てる。

同じ国だが基本的に聖騎士たちと枢機卿たちは政治的に敵対していることが多い。

「くくっ確かにウォーレン卿の言う通りだな」

「最近の聖騎士はたるんできておらんかの？」

「神の騎士が聞いて呆れる」

「これだから平民はいかんだ」

「卑しい血だ」

「それで神の敵と戦えるのか？」

「くくくくく、聖騎士団も落ちたものだなあ」

クロイツに続くように声をあげ始めアルムスを攻め立てる。

今年で一八歳のアルムス。

黄金の稲穂のような金髪を後ろで結んだ若い男。おおきなサファ

イヤのような目とすつとした鼻筋、まだ幼さを感じさせる。

平民の出でありながらこの神聖アティア教国が始まって以来初めて17歳で一桁《ナンバース》の第九席に名を連ねた麒麟児ある。剣の才能とその成長は止まることを知らず巷では「剣の愛し子」と呼ばれている。

しかし、剣のみに生きて来たためかいささか純粋な性格をしている。

その為かこの様に枢機卿に付け込まれる事が多々ある。

アルムスは手を強く握りながら俯いた。

「もういい加減にしたらどうた…」

「……………」

男の低い声が聞こえた途端、騒いでいた男達は刃物を突きつけられたような錯覚に陥る。

アイリアの隣、聖騎士団側座っている男。短い金髪の偉丈夫。短い無精髭に頬には鋭い刀傷。存在そのものが刃物のような鋭さを持ち息苦しさを感じされるほどだ。

スターク・リ・ザース

神聖アティア教国の聖騎士団団長にして、人類最強の男。

鍛え上げられた肉体。

合理を追求し磨き上げた剣術。

魔法は使えなくとも独自の身体強化による圧倒的な力とスピード。

剣を振るう鬼。

これまでの戦いの人生に退いたことはない。

【不動】と呼ばれ恐れられ戦いの頂に立ち続ける男。

故に最強。故に伝説。

元は平民だか貴族になり武の頂点に立ったもの。

サクセスストーリーの英雄として国民から莫大な支持を得ている。

そんな男はアイリアに劣らない凄まじいカリスマを放ちながら座っている。

しかし枢機卿たちも百戦錬磨の猛者ばかり。

すぐに落ち着きを取り戻す。

「…そう殺気を飛ばすものではないスターク団長それを向けるのは我々ではないはずだぞ」

「……」

しかしスタークの目は鋭さを増す。

何度も我が身に向けられるのは避けたい感覚。

アルムスを責めることは諦めたようだ。

日常茶飯事の事態にアイリアは呆れながら進める。

「いい加減にしろ…ばか者…鍵の製造も最終段階に至った。それに合わせて勇者召喚も進めねばならない。それぞれ準備を進めろ。神の園へアルカディア」は近い…気を引き締めてかかれ。アティアの名の下に」

「『アティアの名の下に』」

……

次々と大会議室を出ていく。

アルムスはその中の一つを追い掛けた。

「スターク団長っ！」

大きな背中だ。

剣の愛し子と呼ばれていても団長と未熟な自分の実力はかけ離れている。

合理を貫いた剣。山をも切り裂く鋭さを持つ。

僕は彼の剣に救われそして憧れた。追うべき背中。

「アルムスか…ここで走るな」

不機嫌そうな顔をしているがそんなわけではない。

「はっ！申し訳ありません！」

「…もう少し静かにしゃべろ」

「はっはい…すいません」

アルムスは純粹だからかこう変な迷惑をかけることがよくある。

「…で、なんだ」

「あーはい！さつきはかばってくださいり本当にありがとうございま

す。助かりました」

アルムスは目をキラキラさせながら話す。

それも無理はない。

憧れの人で命の恩人と助けてもらったばかりか話すことができたからだ。

もし彼に尻尾があれば千切れんばかりに振り回されていただろう。

「…そうか、今度から気をつけろ」

「はい！わかりました。」

「ふっ…剣の技も磨け…期待してるぞ」

珍しい笑顔を浮かべた後、白色のマントを翻し歩いて行った。

「はっはい！」

アルムスは喜んだことは言わなくてもわかる。

彼は幸せを噛みしめる

しかし、それは誰かの屍の上に立つ

この世は平等ではない

五話 玉と試練

聖地テラーサの丘。

そこに立つ罪人達の終着点、ステラ砦。

その地下の純白の部屋。

そこで神の鍵の最終段階に入っていた。

「ガラハットの首輪装着及び隷属：無事完了しました」

「そうか…あと一つで我らは神の鍵の製造をやりきったことになるのか…」

長かった…海を渡り、山を越え、金を使い長い時間をかけ道具、薬、数々のマジックアイテムを集め聖都の宝物庫まで開けた。

数々の苦勞、全ては神の園《アルカディア》に至るため。

そのための鍵の一つが揃うのだ。

「では行こう、我々が神の園《アルカディア》に至るため」

「…はっ」

.....

「ふっーふっーふっー」

純白の部屋で俺は鉄の鎖で縛り付けられていた。

血の鎖には劣るが黒く光る首輪をつけられている。

クロ曰く最後の工程。

これで終わりだと思っても恐怖は軽くはならない。

過呼吸気味になりながら俺は時が過ぎるのを待っている。

目は黒革で覆われ何も見えないことが恐怖を加速させる。

最後：最後なのだ…

あの改造を施さなければ耐えられないほどのものなのだろうか。

確かに筋力も魔力もこの世界にくる時とは比べ物にならないものになつたし痛みにも強くなり

傷の治りも早くなった。

全てはこの時のため…俺は耐えることができるのだろうか。それとも…

(シユウ。大丈夫だよ。この魔王の宝玉の結合は痛くはないからね。

君が考えているようなことはないよ

(痛くない? ほんとか?)

(ほんとほんと。あんしんした?)

(うん…よかった…)

力が抜ける。

良かった…本当によかった…

(でも君は試練を受けなければならぬんだ)

(…試練)

(そう試練。魔王の宝玉は君を試す。もし試練を超らなければ…)

(なければ…)

クロが答えをため俺は緊張で唾を飲んだ。

(君は宝玉に意識を乗っ取られ君は…消える)

それは死と同じ意味なんじゃ…

(ふつつ間抜け面だねえ。大丈夫、大丈夫さ。君は強い。悲しいほど

にね。君は向き合うことができる)

(クロ…)

(さあジジイが来たようだ。また会おう)

そう言つてクロは消えた。

その代わりにカツカツと靴の音が聞こえる。

「神の鍵…いやキシシユウヤだったな。今までご苦労だったな。これで最後だ。感謝してる。恨んでくれても構わん。もう目覚めることはないだろうがな…」

目を隠されて見えないがクロイツが言った。

少し申し訳なさそうにしている。

なんだ人間らしいことを思うこともあるんだな。

小さな疑問がうかぶ

「…一つ聞かしてくれ…」

「…なんだ?」

この世界に来なければ、こんな理由で呼ばれなければ俺は…

「…俺は…幸せになれたかと思うか?」

ひとつの素朴な疑問。

(シユウ…)

何だクロもいたのか…恥ずかしいところを見られたな

「…どうだろうな」

「…そうだよな」

だよなあ

急にこんなこと聞かれても困るだろう。

幸せか…確かにそうだった時があった。

その時は知らなかったがなくなってから気づいた。

やすつぽい歌詞みたいだ。

ウケる…

「始めるぞ…」

胸の中に何かが飲み込まれる感覚不思議な感じだ。

痛くないんだな。

そして意識を手放した。

…

目を開ける。

目に入ったのは地平線まで続く白い花畑。

空は青く澄み渡りまるで違う世界に来たようだ。

「ここは…」

俺は確か魔王の宝玉を埋め込まれて…

「久しぶり。しゅう」

「えっ…」

後ろから聞こえる懐かしい声。聞こえるはずの声。

腰まで伸ばした夜の闇の様な艶のある黒髪。

黒曜石のような黒い目。小さな花のような唇。

愛しい親友

「す…ずか…」

「ふふっなに？オバケでも見たような顔して」

可笑しそうに小さく笑う。

やっぱり綺麗だ。

「えっ…だってここは…」

「白髪だらけじゃない、変なの」

鈴香は髪を触る。

細い指、白い肌、女の子らしい細い爪

全てが俺の鼓動を早める。

「ストレス？まあしょうがないよね。あの拷問をうけたんでしょ」

「う、うん」

「そんなに固くならないですよ。もしかして私に会いたくなかった？」

「そんなことはっ！」

「あははっ知ってるよ。しゅうはわたしのことがだいすきだもんね」

花が開くように笑う。

「うつつうるさいな」

「ふふっ始めましょうか！」

「始めるって何を？」

「魔王の試練よ」

そう言っつて鈴香は手を振る

振り返るとそこはさつきまでの花畑ではなかった。

「ここは…」

夕暮れどきの高校の体育館裏。

人通りも少なく死角になっていて周りからよく見えない場所。

俺たちの高校では有名な告白スポットだった。

その場所を隠れるようにしながら様子を伺っている人影。俺だっ
た。

「懐かしいところだね」

「ああ…」

「たしかここで悠馬に告白したんだっけ？」

「…ああ」

隠れている俺が眺めているのは鈴香が悠馬に告白する様子。

鈴香は顔を真っ赤にしながら俯いて手を悠馬に向けられていた。

それを同じように真っ赤になった悠馬がそれを握ろうとするところ。

告白が成功した日だった。

「クツツ…」

隠れている俺は小さくそんな言葉を漏らす。

その時の俺の役目は告白成功と供に出て行ってクラツカーを鳴らすことだった。

鈴香に頼まれたら断れない。

惚れた弱みというやつだ。

握った拳は白く俯いた目には涙がたまっている。

「私も酷いことするとは思わない？・しゅう」

そう言つて鈴香は俺に話しかけた。

「……二人は幸せだろ？おれもそれが嬉しいんだから……だからこれでもいい」

「また嘘をつくの？」

「…嘘じゃない」

「嘘つき」

「……」

「次はだんまり？」

俺は答えない。

「じゃあ次ね」

そういつて鈴香の形をしたナニカは手を振る。

すると景色が一変する。

次は中学校の三階にあるトイレ。

使う人も人通りも少ないところだ。

「なんでお前が神崎と一緒にいるんだよっ!!」

「釣り合おうとおもつてんのか?!」

「ぐっ…いてえ」

「だいたいあの二人と親友なんて変だと思つてたんだよ!どうせ寄生してんだろ?あの二人はお金持ちのいえだからな!」

「そんなんじゃない!友達だ!」

「嘘つくな!」

拳が頬に飛ぶ

「ぐぶっ!!」

目に当たってチカチカする。

その時はまだ身長が小さかった俺の体が床に倒れ水で少し濡れる。

「ちっいこうぜ」

「ああ死ねよこいつ」

「クソチビが」

そう言っつて学ランを着た中学生がトイレから出ていく。

俺はトイレの床に倒れたまま泣いていた。

「ぐすつ…いたいよお…」

まだ一四歳の頃こう言っつた嫉妬のせいでいじめられていた時の光景。

「なんで…なんで俺だけ…」

床でうずくまりながら呟く。

「ほんとなんだよお…大切な友達だもん…信じてよお…ぐすつ…」

「これは？」

「…鈴香も悠馬もよく目立つ2人だったから…その…中学生らしい嫉妬だよ。二人に当たらないから僕に向かってたんだ…」

「そうだったわねそれを私たち二人は気づいてなかつた全てもあなたが泥をかぶつてた。そうゆうことね？」

「…まあ一応。しょうがないよ。適度にガス抜きでもしないと何するかわからないしね…そのガス抜きに僕は最適すぎた…」

二人の栄光の生贄に俺はふさわしかった。

「それでよかったの？」

「…いいんだよ」

俺は足元に転がる中学生の俺を見下す。

こぼれ落ちた涙が緑色のタイルに点を作る。

無様だ。ウケる。

「また嘘つくんだ…」

「……」

「あなたは残酷ね…自分に対してどこまでも」

「っ……い」

鈴香は怯えたように体を強張らせた。

辛い記憶を見せられているキシシユウヤは狂い始めた。

いや彼は最初から狂っていたのかもしれない。

確かにあつた小さな幸せを壊さないため、大切な人を自分で傷つけないために必死に隠して続けていた。

しかし、この世界はそれをえぐり出す。

それが試練。

その目は暗く深い闇を宿し始めた。

拒絶された悲しみを…

「そうだよな。忘れてるよな。なんだか笑えるよね…君は冗談はやめてよって笑いながら言ったんだ…無様だ。無様すぎる」

「しゅう…」

「良いんだよ。別に。悪いのは俺さ。俺なんだ。おれなんだからああ!!!」

そう叫んだ。

そう言つて俺は宝石を触るように白い頬に手で包み黒曜石のような大きな目を覗き込む。

「綺麗な目だ。俺はその目が大好きなんだよ。俺は鈴香のことが…」

俺の膝は力を失つたように崩れ落ちる。

「好きなんだ…けど、けどさ！悠馬も好きなんだよ…ごめんなごめんな俺が悪いんだ。本当にごめん。鈴香怖がらないでくれえ。お前らまで失つたら俺は…俺はああ」

涙が流れる。涙が溢れて止まらない。

「ごめんね…まだ終わらないの試練はまだあるの…」

そう言つて手を振る。

そして変わる景色。

そこはちいさな畳の部屋。

窓から見える空はオレンジ色に輝いている。

部屋は暗くよく見えない。

部屋は糞尿の臭いと血のにおい。

その部屋の真ん中に天井から縄でぶら下がる女の体。

岸秋也の母だ。

「……こは？」

「俺の家だよ……」

俺は這いずりながら母だったものに近づく。

「ただいまかあちゃん、今日さ悠馬と鈴香と一緒に秘密基地を作ったんだよ。そしたらね……」

母親だったものを優しく撫でる。

「かあちゃん……なんか言ってよ……寂しいんだ答えてよ！かあちゃん！」

母の吐瀉物で汚れた服を掴み、

揺らす。揺らす。揺らす。

ギシギシと言って縄が泣く。

「ねえねえねえねえ！」

「しゅう……」

おぞましい光景だった。

ナニカは手を振り、白い花畑に戻った。

「……あれ？……かあちゃん？……どこ？……どこ？……ひとりにしないで……ひとりにしないでよおお!!」

岸秋也は花畑の中にうずくまり子供のように泣き叫んだ。

「ああああああ……寂しいよかあちゃん……どこお……」

孤独。彼はどこまでも孤独だった。

父が子持ちの女の浮気をして離婚。

父はその一年後にその女と結婚していた。

生活が苦しくなりその上最愛な人も奪われた母は少しずつ壊れていった。

そして小学三年生だった彼に与えたの理由なき暴力。焼けたスプーンで肌を焼き、その足で蹴り上げ、水のはった浴槽に顔を押し込み、彼を傷つけ続けた。

幼い彼は、抗うことも出来ず理由を自分が悪いのだと思った。そう思うことにした。静かにうずくまりながら、優しい母が帰ってくることを信じて。しかし彼が小学五年生ときそんな小さな願いも裏切られる。母が自ら命を絶った。

夕方だった。

学校が終わり友達と遊び家のドアをくぐって母の死に様を見た。彼は一人ぼっちになってしまった。

そんな彼を引き取ったのは母と自分を捨てた父だった。罪悪感を感じたのだろう。

しかし馴染めるはずもなく、ご飯は一人で屋根裏で食べ他の家族と会うことは滅多になかった。

幸い元々の家と離れていなかったため幼馴染2人とは仲の良いまま引き取られた彼は屋根裏部屋で過ごしていた。

一つもあの地獄の改造の記憶が流れてこないことに鈴香の形をしたナニカは疑問を抱く。

「ほんとは壊れてたのか……ここにくるずっと前から」

鈴香の形をしたナニカはうずくまる岸秋也を見ながら思った。

「どうしたい……？」

どうしたいのだろう。耐えて守り続けた小さな親友二人との生活をうばわれ地獄あじあわされる日々を送ることになった彼は。

どうしたいのだろう。

うずくまっていた体を起こし呻き声をやめはつきりと

「許さない……」

そういった。

目は爛々と輝き歯を食いしばったまま小さく呟く。

足元に広がる白の花が血のような赤に変わる。

「俺は……俺を不幸にした世界を……許さない……許せない……」

赤の花は増える。

ヨレヨレと立ち上がり鈴香の形をした何かを睨みつけた。

「一人にした母を許さない。俺を捨てた父を許さない。嫉妬に狂った

奴らを許さない。切り刻んだ奴らを許さない。そばにいてくれた二人を許さない」

髪が白く染まる。

白銀の星のような輝きを放つ美しい髪。

目もルビーのように赤く染まる。

人間らしさを失った結果、寒気がするほど美しさを宿す。

「ゆるさないゆるさないゆるさないゆるさないゆるさないっ!!!」

止まらない怨みの言葉。不幸を、理不尽を、孤独を、劣等感を、嫉妬を、彼は力に変える。

「俺は世界をゆるさない!!!」

血の花が広がっていく。

「ならばどうする!?!」

「俺は世界を殺す!奪う!踏みにじり蹂躪する!」

彼は叫ぶ。世界に向かって恨みを叫ぶ。

「そうか!ならば貴様にくれてやる!八王の一つ!冷たく硬く鋭い。

鉄の王の席を!!!」

ナニカは消え始め鈴香の声ではない轟く様な声が響く。

「力を喰らえ!憎しみを燃やせ!涙を啜れ!ただ一つの骸の山の頂へ!貴様は!!!」

血の花の中、一人で立つ血の花園の主は立った

「王だ!」

鉄の王は放たれる。

世界に復讐するために

しかしここに完成した魂の格が高い人工の魔王。

しかも力も発揮できず隷属してあるまさに理想的な神の鍵。

そのはずだった：

パキヤンツ

「ギャッ！」

「あがつ」

「ペキヤツ!!」

キシシユウヤの近くにいた信者たちの頭が吹き飛び脳漿が飛び散り血の花が咲く。

「なんだ…!?!」

「気をつける!!」

信者たちは慌て始める。当たり前だろう。

たった一瞬で約半分が命を散らしたのだ。

ヒヤンツ

「あひゅっ」

また一つ血の花が咲く。

純白の部屋の祭壇は血で濡れて頭の無い死体が転がっている。

神の鍵を、魔王を、近づいて覗き込んでいた信者たちだ。

その折り重なった信者達の死体の上に白銀の髪を持つ男が立っている。

伸びきった白銀の髪の間に見えるルビーのような輝きを放つ瞳。

その姿は寒気がするほど美しく刃物のように鋭さと氷のような儂さをまとっていた。

自分たちが体をいじくりまわし人としての尊厳を踏みにじった相手。

神の鍵。悲劇の魔王キシシユウヤ。

ガラハットの首輪はその魔王の手の中で手が中でグシヤリと音を立て握りつぶされる。

自分たちが施した地獄の改造によってもたらされた怪力に寒気を感じた。

すると足元を見ていたキシシユウヤは生き残り達に視線を向けク

ロイツに話しかけた。

「奇遇ですね。クロイツさん。僕も感謝してますよ」

丁寧な言葉だがそれが返って恐ろしさが増す。

冷たく鋭い鉄の様に感じる言葉だった。

「あなたたちのおかげです……あなた達のおかげで僕は力と機会をもらった……本当にありがとうございます」

そう言っただけでキシシユウヤはさらっと笑う。

生気を感じさせないほど儂い笑顔だった。

「なんの……機会だ……？ 神の鍵よ……」

クロイツは、警戒しながらそうたずねる。

「ふふっ決まってるじゃないですか……復讐ですよ」

そう言うときキシシユウヤを縛り付けていた鎖がクルクルと彼を中心に球体のように覆い始めた。

「僕は復讐をします。世界すべてに……僕はあなた達を許さない！」

ヒヤンツヒヤンツ

ふわふわと浮いていた鎖を作っていた鉄の輪の一つ一つがものすごいスピードで突っ込んでくる。

「ふあっ」

「ギャツ」

次々と頭が吹き飛ぶ。

しかしクロイツはアティア教の枢機卿の一人だ。

危なげなく飛んできた鉄の輪を避け魔法を放った。

「光《ライト》の矢《アロー》!!」

光魔法第二階位の光《ライト》の矢《アロー》。

眩い光を放ちながら突き進む。鎖の輪と同じほどの速度を出しながらキシシユウヤ心臓に向かい。

貫いた。

キシの白い服に血が広がる。心臓を貫かれたのだ。

普通の人間なら致命的な傷だろう。

しかしそれで死ぬようならとつくに改造で死んでいるだろう。

「やったか!？」

「いや…まだだ」

そんな訳がない。

白仮面の信者が声を上げるがクロイツは冷静だったら。

これほどの力を持つ魔王が避けられないはずがない。避ける必要がないだけだ。

それはとても正しい答えだった。

「ふっつ痛いじゃないですか…クロアツさん…これ以上僕をためつけて何がしたいんですか？」

「ジュルジュルと音をたてて傷が治る。」

キシはその間ニコツと笑いながらクロイツを見つめていた

「…そう思うなら大人しくしている」

「あはっ！無理ですよっ!!」

そうキシが言った瞬間通常こっちに走り出してきた。

加速した衝撃に耐えられず足元の死体が弾け飛ぶ。爛々と血のような目を輝かせて突っ込んできた。

「くそっ！」

しかしクロイツも唯の人ではない。

即座に魔力を練り始めた。

すると白い古代魔法文字が魔法陣を作り上げられそこに魔力を通して魔法が発現させる。

「聖《ホーリー》なる輪《サークル》!!」

キシの拳が届く前になんとか魔法を完成させる。

しかしキシは構わず拳を振り下ろした。

グシャっ！

「ちっ…」

しかし流石にただの拳で第三階位の魔法は碎けない。

結界の外に血と肉がつく。

とんでもない力で殴ったからかキシの手は潰れて血だらけになっていた。

本来ならもう痛みで動けないはずだが彼は違う。

視線を腕に向けた途端またジュルジュルと音を立てながら色素の

薄い手に戻る。

「…硬いですね」

キシは赤い双眸でクロイツを睨みつける。

「当たり前だろうが…ただの筋力で第三階位の結界にヒビを入れるとは…全くとんでもない化け物を作ったものだ…その上その鎖はただの鉄…くそっ魔王の力か…なぜ使える!？」

「あはっ友人のおかげです。まだ慣れてませんが…彼女曰く鉄の王とゆうらしいです」

「鉄の王…八王の一つか…厄介だな」

「まだ使い慣れていないので未熟なものです」

くるくると瓦礫を弄びながらさらっと笑う。

そう彼はまだ力を正しく使えていない。

鉄の王の本来の使い方は鉄をはじめとするすべての金属を支配する力。形を変える事や平温での液化化や固形化極めれば気体に変えることもできる。

「そのようだな…ならば今が最大のチャンスとゆうことか…くくつならもう一度捕まえ逆らう気力がなくなるほどいじめてやろう」

「あはっこわいなあ」

クロイツは練り上げておいた魔力を使い魔法陣をつくり右手を向ける。

まずは牽制のための魔法

「聖《ホーリー》なる雨《レイン》!!」

百発を超えるほどの光の雨がキシに向かって降り注ぐ。

「ちっ容赦ないな…」

しかしキシも大人しく食らうはずもない。

鎖を地面に突き刺し右足をあげ地面を踏みつける。

その途端めくれ上がった大岩を何本もの鎖で釣り上げ攻撃を岩を傘のようにして防いだ。

クロイツはその隙に近づいて斬り付けようとするがキシは白仮面の信者たちを殺した鉄の輪をクロイツに叩き付けようとする。

それに気付いたクロイツは近づくのを諦め右手の指にはめてある

結界を込めたマジックアイテムに魔力をこめマジックアイテムを発動させた。

直後に光の四角形が生まれ鉄の輪を防ぎ切り指輪は役目を終え砕け散る。

その瞬間を狙ったキシが土埃を抜け右手を振り上げている。

しかしクロイツはすでに魔法陣に魔力を通していた。

「聖《ホーリー》なる恵《グレース》み!!」

幾多の光の玉が唸りを上げてキシに向かっていく。

「あはっ痛そうだっ…!」

近づくのを諦めそれを寸前のところでかわし続ける。

しかしその中の一つがまるでスタングレネードのようなものすごい光と音を出し爆発した。

バキイイインツ!!

キシは光と音の爆発で視界と聴覚を奪われクロイツを見失う。

「くそっどん!!」

その隙を見逃すクロイツではない。

即座に補助魔法と光魔法の結界をかけながらキシに突っ込んでいく。土埃を切り裂き見えたのはキシの背中。莫大な魔力と筋力を持つていても戦闘経験が皆無のキシなど百戦錬磨のクロイツには伝説の剣を持った小さな子供と老練の騎士に大差なかった。

どちらが強いかなんて聞かずともわかるだろう。

「そっちかよ!!…」

「もう遅い!!神《ゴッズ》の御髪《フェルゼ》!」

両手に光魔法でできた魔力の刃が発現する。

第四階位の魔法だ。

クロイツも神に選ばれた一握りの天才。

クロイツの両手が唸りを上げ両足を切り落とした。

ヒュンツヒュンツ

鋭い神の刃は魔を狩る。

「あがつっ!!」

聞こえてきたのはよく聞いた痛みによる悲鳴。

キシの支えを失った体は瓦礫と死体の山に倒れる。

「聖の磔《ホーリーバインド》!!」

その隙にクロイツは素早く光属性で縛り上げ頭を踏みつけ宝玉のある背中の位置に刃を少しねじ込む。

「ぎあやっつ」

魂そのものを攻撃されたような痛みが走る。

「……残念だったなキシシユウヤ。調子に乗りすぎだ、あの時お前は直ぐに逃げるのが…正解だ」

「……」

爛々とした赤い目がクロイツを睨みつける。怨みが渦巻く血の目、絶望的な状況でもその目は揺るがなかった。

「ふん… 忌々しい目だ。しかしこれでお前は終わりだ。勇者に殺されるその日まで生え続ける手足を切り落とし続けてやる。」

クロイツはキシを睨みつけてそう言った。

恐怖で歪むのを見てやろうと思っていたがキシが浮かべたのは口が裂けた壮絶な笑みだった。

「…何が面白い…」

「クロアツさん…何で僕がああ首輪から逃げられたかわかりますか？」

「……魔王を隷属するには格が足りなかったのだろう」

「いえ、充分でしたよ。最初は確かに動けませんでしたが」

おちやらけた雰囲気を出しながらクイズのような気軽さで答える。

「だったらなんだ。もうお前の運命は決まった。あと陵辱され痛みと血の中で死ぬだけだ」

「わからないなら教えてあげます。ここだけの話実は、僕に味方がいたからですよ」

神の信徒の中に裏切り者がいた。

その言葉にクロイツは無意識に魔力を放つ。

「あつ違いますよ。クソ信者ではないから安心してください彼らは忠実に神様に従ってました」

「……では誰だと言うんだ」

キシの態度にイライラし始めたクロイツは左手を切り落とす。

「ぐっあつっ!!…ふっーふっー…すぐ怒る。」

なら教えてあげますよ。ここから俺の番だ!」

そうキシが言った途端右手の鎖の火傷から血の色をした鎖が飛び出してきた。

「なっなんだと!!」

クロイツは素早く逃げようとしたがクロデイルの血鎖が縛り付けて篋巻きにする。

「っこれはっクロデイルの血鎖!!なぜこいつが!」

「形勢逆転ですねクロイツさん」

手足が生えた白い魔王が立っている。

クロイツにとつて絶望的な状況。

周りに人はおらずいるのはキシとクロイツのみで逃げられる手段もない。

「貴様っ!最初からこれを!」

クロイツはキシを睨みつける。

「まあクロイツさんは俺を殺さないことはわかってたまましたしね。あとは僕が痛みに耐えるだけ…近くに近づき油断さえしてくれればこつちのものです。その鎖は別格ですからね。逃げられないでしょう?」

「くそっ…貴様あつこれを外せ!」

クロイツは暴れるがカチャカチャと金属の音が響くだけ。キシはそれを見ず中央に視線を向け

「どうせだから同じシチュエーションにしましょうか」そう言つて篋巻きになったクロイツを部屋の中央の祭壇の上に引きずりあげる。

「くそがっ!何かする気だ小僧!」

「いえなに、ちよつとした味付けですよ…」

「何を訳の分からんことを!自分が何をしてるのかわかっているのか!私は世界最大の宗教、アティア教の!」五月蠅いジジイですねー。あはっ…もしかしてクロアツさあん…この鎖の効果。忘れちゃいましたか?」

が響く。

.....

「足りないな」

目を見開き白目を剥いた壮絶な表情を浮かべる老人の頭が転がって落ちたいく。

「足りない…足りないさすぎる…俺が奪われた物に対して死にかけのじじいとその他もろもろの有象無象の命なんかじゃ。俺は満たされない…奪われた幸せには足りない…」

瓦礫と屍の上に腰を下ろしながら頭を抱える。

血を流しながら望んだ結果、俺はクロイツを殺し一つの復讐を果たした。

しかし満たされない。

どうしても渴く。渴いてしまう。

あれほど復讐を渴望したはずなのに満たさなかった。

甘い復讐をしている時の万能感とそれをを終えた後の喪失感はまだで麻薬のようだった。

彼は世界を許さない。

殺したいほど憎んでいる。

しかしそれと同時にどうしても

…幸せになりたかった。

もうどんなものかも忘れてしまったが全て満たされていた時に戻りたかった。

かつて確かにあつて世界に奪われた愛を…どうしても…

(シユウ…)

「…クロか？」

顔を上げるとふわふわと浮かぶ黒のゴシッククロリータを着た十歳ほどの黒髪の少女がいた。吸い込まれそんなほど黒い髪と瞳。幼さとともに妖艶な雰囲気持っている。そして皮肉なことに少し…鈴香に似ていた。

「その姿は…本当にクロ?」

「…ふっつびっくりした? そうさっ愛しのクロちゃんだよ!」

腰に手を当て胸を張り、ババーンっ!と自分の口で言っている。

「ババーンって…その格好…一体どうしたんだ? いつもモザイクだったじゃないか」

「それはねーシユウが魔王になった時に漏れた魔王の力とクロイツの魂を食べたら少しだけ本来の力が戻ったんだよ! 私からならシユウだけに触れられるようになったんだ。所でどうだい? けっこう、いやかなりかわいいだろ?」

うっふーんのポーズをとったクロ。

その可愛らしさに少し癒される。

「うん…かわいいよ。こっちの方がモザイクの数千倍いい。」

暗い雰囲気焼き飛ばそうと明るい声で喋る

「ふっふっふー。そんなに褒めないでくれよもっ魂を喰えばクロちゃん大人バージョンになれるよ。ボンツキユンボンのないすばでいーなんだからな…:…それに…」

優しくふわっクロは笑った。優しい笑顔。

そしてクロは俺に近づいてぎゅっ頭を抱きしめてくれる。

「こうして…触れられる…」

ずっと忘れていたから、ずっと前に失ってしまったから、何をされたのかわからなかった。

久しぶりに感じる人の温もり。

いつ以来だろう…。

クロは静かに優しく悲しい銀髪を撫でる。

血の色をした瞳が涙で揺らぐ。

「君は幸せなならなければならぬ…」

「…:…クロ…ずっと気になってたんだ」

「ん?」

「どうしてクロは、俺に優しくしてくれるんだ?」

そう聞くとクロはバツの悪そうな顔をしながら頬をかきながら

言った。

「そうだな…バカな不器用さがなんだか愛おしくてね…これが理由さ…」

「あはは…変な理由だ…変な…」

そして頬が濡れていたらことに気づいた。
すると涙と嗚咽は止まらなくなった

七話 鉄と旅

「ああ…情けない…情けなさすぎる…こんな小さな女の子に慰められるなんて…」

俺は目が覚めてから賢者タイムに陥っていた。

クロに慰められたあと二十分程泣いた。どうやらその後俺は泣き疲れたのかそのまま寝てしまっていたらしい。

なぜ魂だけの存在のクロに触れられるのかはよくわからないが、膝枕までしてもらって…情けない…

そうだ死のう…

「おいおいつなに物騒な事を考えてるんだ！いいじゃないか泣いたって…よしよしかわいかったぞーまるで子供のようだった」

綺麗な顔をニヤニヤと歪めながら俺の顔を覗き込んできた。

「……………」

死のう

「あーごめんごめん死ぬな。死んじゃダメ！そもそも僕は少女じゃないんだからな。この姿は本来の姿ではないんだよほんとならナイスバディーの美人お姉さんなんだからな！君の何倍生きて…生きてはないな…とにかく僕は少女ではないんよ！」

そんなことをわちゃわちゃ手を振り回しながら言っている。この性格で大人になっても中身が少女なんじゃ…

「クロオブレッドオオー！」

クロの拳が唸りを上げる。

「ごぶっ…！…わかったごめん…クロはお姉さんだ」

「わかったらいい」

はたから見たら瓦礫と死体の山の上でじゃれ合う二人は不気味に見えるだろう。

「で？…これからどうしようか…？」

クロがコテンツと首を傾げながらたずねてくる。

あの死闘から一時間程度、時が流れた。

魔王の特別製の身体に傷の跡はあるがもう痛みはない。
今の自分には何もかもがたりない。
復讐するためにも幸せななるためにも力が知識が必要になる。
ならばするべきことは決まっていた。

「逃げよう…」

「次も今回のような搦め手が効くとは思えない。奴らにとって俺はもう逃がしてはいけない敵になってしまったからな…それが生きていてるか死んでいるかはもう関係ないだろう…最善はもう支配できない俺は殺した方がいいだろう…力をつけるまえに…」

感覚を確かめるように手を開く。

強く…強くならなくてはいけない

「そして必ず…復讐を果たす…俺の幸せの糧になつてもらう」

魔王の宝玉の中で誓った。

俺は許さない…

血を感じさせないほど白い手を握りこんだ。

「そうだね…そうと決まったら早速動こうか！」

座っていた瓦礫から立ち上がり瓦礫と死体の丘を降りる。

「まあまずは服だな」

そう言つてボロボロになった白い服を引っ張る。

「じゃあいくか。クロ」

「あっその前に…」

クロはクロイツだったものに近づく。

「こいつが持ってたこれずっと気になってたんだよね。」

そう言つて指から小さな指輪を取り出した。

白いガラス玉のような小さな水晶を金の台座に埋め込んだ美しい指輪。

「これは…」

「ふっふっふ。こいつはこの砦の宝物庫の鍵だよ。こっそりつけて見ていたんだ僕は魂だけだから見えないしね」

と言つてニヤリと悪そうな笑みを浮かべている。

「なかなか面白いものもあったしね…持てるだけ拝借させてもらおう」

「…そうだね。先立つものは必要だし」

「よし…ならこっちだよ」

そう言つて俺たちは出口を目指して歩いた。

.....

「…ハハ？」

「ハハ」

あれから歩き回りようやく目的の場所に着いた。

長い時間をかけて…

「クロ…絶対に俺とはぐれないでね…」

「うつつうるさいな！ちよつと調子が悪かったんだ！」

クロはあの部屋を出てからあれ？こっちだよね？ん？と不安になる言葉をぽつぽつとこぼしながら右へ左へ歩き続けようやくついた。

「迷子になったら致命的だ…今生の別れになりそう…やめてよ俺にはクロしかいないんだから…」

「しつ失礼なこと言うな！砦とは敵に攻め込まれてもいいように分かっていくく作られているんだよ！つまりこの砦は素晴らしい！と言うわけだ！」

「いや…同じとこ何度も…」

「さあ！お楽しみのお宝を見てみようじゃないか！しゅう！」

「…」

ごまかしたな

クロはふわふわと浮きながら扉に向かい俺もそれを追った。目の前には黒く大きな扉。

その真ん中には小さな穴が空いている

「ここに指輪をはめて魔力を流して」

「…わかった」

俺は穴に指輪をはめ慣れない魔力を困る。

すると扉はすーっと開き始めた。

長細い部屋には沢山の棚が並んでいた。

その棚の中には見覚えのある魔道具や薬が並んでいる。禍々しい黒い兜。どぎつい色をした何かも薬品。

見覚えどころ効果までわかる。

わかってしまう。

思考が冷めていく

「…いや…そんなつもりじゃ」

クロは、黙ってしまった俺を申し訳なさそうに見ながらワタワタしている。

なんだか面白くて笑ってしまう。

「あははっいやいいんだ。これはもらっていいこう…あいつらのことだ、また繰り返し返すかもしれないしな。俺一人で十分だ…」

「…そうか…そうだね…まだ先があるんだ。後で取りに来よう…」
「りようかい」

奥に進むと今度は、光り輝く宝飾品や魔力を感じる武器や防具、そして大量の金貨だった。

「おおお〜これはすごい…お金持ちだな」

「そりや世界最大の宗教なんだからこれくらいあるよ。」

「でもこんなに持ってけないな…選ばなきやな最低でも金とあの薬と魔道具は持ってかないと…」

それだけは譲れなかった。

壊すこともできるが…あれはいつか使うつもりだ。

「ふっふっふっ。その心配はいらないよ！入口の扉があつたでしょ？あの大きな黒いやつ。この部屋はあの扉の魔法で作られた不思議空間だからね！選ぶ必要はないんだ。あとはあの扉は大きさを換えられるからね持ち運び可能な空間ってことだね。クロデイルの扉って言うんだ」

「どこ〇もドアみたいだな…」

「そんな感じだね〜どっちかと言うとど〇でも部屋って感じかな」
つまり持ち運び可能な宝物庫か…

人前じゃ使えないな

「まあ先ずはお金だね適当にとっておいて。金貨五枚があれば十分だよ。あと銀貨持ってね。あとはこれと、これと、うーんローブもいるしあとはこのブーツに……」

クロはそう言いながら俺に服や装備を着せていく。

そうして俺は、一丁前の旅人のような格好になった。

薄い黒のマントに何かの皮で作られたブーツに使えない普通の鉄剣を二本差している。

「おおなんかかっこいいな……」

「ふふっクロちゃんコーデイネートだからね。任せてよ！ささっ一番欲しいのはこれじゃないんだよ。こっちだ」

そう言つてクロが指差したところはインゴットの積まれた小さな山だった。

「インゴット?」

「そうさー！ここにるのは鋼鉄のインゴット二十本と魔鉄のインゴット八本だよ」

ニコニコと笑いながらクロは浮いている

「これをどうしろつて言うのさ……あっちのかっこいい剣とか槍の方がいいんじゃない……」

魔力を感じる赤い剣や大きな盾、綺麗な宝石がついた槍……ではなくクロはインゴットを指している。

そんな俺をやれやれといった風に見ているクロ

「はあ…君は一体なんの王様なんだい？君には宝玉にもらった力があるでしょうが」

「あつそうだった！金属を自在に操れる…だったよな」

「はあ…さっき初めてにしては上手く使ってたじゃないか…」

「ごつごめんって。さっきのことはよく覚えてないんだよ必死で…それでこれを持ってけばいいのか?」

「違うよ！ほらっ手をかざして魔力を流してみてそしたら支配できるから」

「支配って…」

俺はインゴットの中の一つを手にとった。
冷たく硬い鉄の塊

手の中で鈍い光を放ちながら佇んでいる。
トクンッ鉄の鼓動が聞こえてなぜか力の使い方が本能的にわかつた。

肉体を超え魂に刻まれた力。

俺はその感覚に従った。

「…」

すると鉄は溶け出し手の中に沈んでいった。

「出来たね。それが八王の力の一つ…鉄の王だよ」

「おおおお……すごいな……」

ある。体の中に確かに金属の気配がする。俺はその感覚を確かめるように次々とインゴットを吸収していった。

「ふふっ嬉しそうだね…鉄の王の能力の長所は大きな破壊力や速さとかではなく圧倒的なまでの自由だ。自身の想像力によって創造する…これが君の力だ」

「想像と創造の力…」

「そうだよ。口にするとややこしいけどね」

黒はふわふわと浮き俺の背中から首に手を回し抱きしめる。

「シユウ…強くなって君は生きるんだ」

「うん…わかってる」

俺は世界に確かにあった小さなそれを奪われた。

耐え続けて手に入れたちっぽけなそれ

思考が冷めていく

俺は俺を守り世界を壊す…絶対に

パンと手を叩きクロが喋り始めた。

「よし…じゃあ扉を回収しておいてよ」

「わかった」

「どこかに逃げようか…この砦の奴らは全滅したみたいだし仮面達の親玉が気づくのは少し先だけど早く逃げるのに越したことはないからね」

「聖都はどっちにあるの？」

「ここから西にあるから東に向かった方が無難だね。そうするかい？」

「…わかった。できるだけ徒歩で行こう足と情報を遺したくない」

「決まりだね。でもその前に掃除だ」

そう言ってクロはニコツと笑った